

キャラ・スマホ・オンラインゲーム時代の子ども達の対応

日本は、1983年の「増税なき財政改革」以来、国による福祉・公共サービスを縮小する、「小さな政府」に転換し、国鉄・電電公社・専売公社・郵便局などの民営化を強く推し進め、大幅な規制緩和によって通信事業に民間企業が参入、ポケベル・ケータイが生まれ、市場原理主義の経済社会に大きく変わりました。

並行して、家族も子どもは一人ないし二人の少子化となり、祖父母は別世帯の核家族が増えました。父親は心理的に、実体として不在となり、また、鍵が掛かる個室を持つ子どもが増えました。個室に居れば、お互い傷つけ合う家族関係も避けられるんですね。但し、貧困家庭では個室などはありませんが。

人と人との関わりは、かつてののび太君やジャイアンのように密接、濃厚なもので、上下関係が守られ、拘束的なものから、とても希薄なものとなり、上下関係よりも同級生同士の、横の繋がりが重視され、それも学校、塾、地域で使い分けているんです。

通信事業も、市場原理によるケータイの価格ダンピングが起こり、格安スマホが市場に開放され、情報化社会は一気に進み、人との繋がりは、一人一台のスマホ上のLINEやTwitter(現X)などのSNSによる広範囲なものとなり、直接の関わりよりも重視されるようになりました。

ケータイやスマホは、個室に持ち込んで自由に連絡や通信ができ、個室感覚のコミュニケーションが普通になりました。スマホや音楽プレイヤーを持っていれば、電車や歩道でも公の空間ではなく、個室をそのまま外へ持ち出しているんですね。ただ、ご存じのように、友達と頻りにLINEやメールのやりとりをしますが、LINEやメールが来るとすぐに返事をしなくてはなりません。すぐに返事がなければ、無視されたと同じで、何か関係が切れた感じになるので、LINEやメールは不安を生み出す元になってます。広く浅い関係であるにも関わらず、そこから抜けることは許されない圧力を持っています。「いじめられグループ」に入らないためにも必死なんですね。

しかし、これもご存じの通り、LINEやメールでは視線、声のトーン、表情、様子、距離感を伴った感情は伝わらないので、本心を分かり合えません。繋がりを求めながら、距離感を保ち、当り障り無く相手に合わせているんですね。その中で、一旦相手の感情を疑い始めると、それを覆す手段がないんです。

そこは、人は社会性を持った動物ゆえに、人との関わりの中で自己、則ちアイデンティティを確立し成長していきます。ところが、スマホ時代はとても希薄な人間関係だから、子ども達の自己がとても不安定になります。今の子ども達は、不安定な自分を隠し、自分の「キャラ」を作り出し、その「キャラ」で友達と繋がっているんですね。

今の子ども達は、TVやネットの影響を大きく受け、バラエティ番組の“ひな壇芸人”やユーチューバーをモデルにしているようです。同級生と繋がるために、自分なりの“キャラ”を立てることで、クラスの中の自分の役割、立ち位置を持つ生徒が増えています。付き合いは、お互いの“キャラ”で行っているんですね。「キャラが立っている」と、言うのは、く

つきりとした人物像を演じている、という意味なんですが、「キャラが立ってないと話しにくい」し、「キャラで話し、キャラでLINEしている」んですね。

自分を出せるごく限られた友達とは、直接電話で話せ、素直な自分で会えるんですが、そういう友達を持つ子ども達は殆どいないようです。

「現代人は自己が不安定になった時の防衛として、自己愛を肥大化させる」と言われますが、まさに自己の不安定さを「キャラ」で隠し、自己愛を肥大化させてるんですね。

バラエティ番組で、空気を読んでうまくMCを演ずる芸人のように、子ども達も「キャラ」で上手に振る舞うことができれば、ある程度の自己主張も許され、少なくとも肥大化した自己愛は傷つかず、その間は急激な自己評価の低下も避けられます。また、SNSやオンラインゲームで「低い自己評価と強い承認欲求」を満たしているんですね。

しかし、そうした「肥大化した自己愛、低い自己評価と強い承認欲求」は子どもだけでなく、「ポケベル」を経験したその親たちのものでもあるようです。子どもが親の自己愛を満たさなければ、親の自己評価が下がって欲求不満になり、そのはけ口が子どもに向かい、虐待やネグレクトに走ってしまいます。また、不安定な自己を「キャラ」で「自分ってこんなに強いんだぞ」と見せかけ、人を利用します。これが学校のいじめ、ひいては不登校に繋がっています。

そして、今の子ども達の間では、子ども感覚を共有することで繋がる交流が普通になっています。子どもに退行しやすいことが今の思春期・青年期の特徴となり、「カワイイ」「キモい」「ムカつく」などが共通語になってるんですね。

そのように振る舞う原因である「不安定な自己、アイデンティティを、安定した自己に回復させる」ために、子ども達に「共感する」ことです。その基本は、「おうむ返しの傾聴」です。「そう、友達を殴って殺したいほど、悔しいんだね」とオウム返しに答え、子どもに「共感」することです。

自分を保ちながら、子どもが考えるように考え、子どもが感じるように感じ、子どもが信じているように信じ、子どもが行動しているかのように体験することです。

子どもにとって一番大好きな親が自分に共感してくれる、自分の存在をそのまま受け入れてくれることは、子どもの強い承認欲求が満たされ、肥大化した自己愛を正常にし、その子の心の安定を、安定した自己を回復させます。

そして、こうした共通認識のもとに、大阪府こころの健康総合センターの精神科医・原田正文氏が提案しているように、家族と学校、地域と専門機関のネットワーク、「チーム学校」を構築し、連携して対応することだと思います。

*アイデンティティ（自我同一性）の確立とは

「自分が男として、あるいは女としてやっていけるのか」「大人社会の中でちゃんと生き行けるのか」、この二つの問いに答えを出すこと。

（2022年10月1月放送 FM 島田「ひげぐま先生の相談室」から）